

# 建文帝の諡号について（１）

Evaluating Ming Emperor Jianwen  
from the Perspective of his Posthumous Title (1)

滝 野 邦 雄  
Takino, Kunio

## ABSTRACT

This essay investigates the changing evaluations of Ming Emperor Jianwen from the perspective of the posthumous title he was granted. As a result of this investigation, the following is elucidated. Although it was often discussed, Emperor Jianwen was never granted a posthumous title during the Ming Period, following Emperor Yongle's usurpation of the throne. When political power shifted to the Southern Ming, he was finally granted a posthumous title. In the Qing dynasty, the title was taken to mean that although he was an excellent emperor morally, he had lacked the ability to rule effectively.

## はじめに

明一代を通じて建文帝の諡号<sup>(1)</sup>・廟号は、たびたび議論されるが、贈られることはなかった。ようやく、南明政権になって、建文帝に、

嗣天章道誠懿淵恭覲文揚武克仁篤孝讓皇帝  
と諡号を贈り、廟号を

惠宗

と決めた。

また、清政権は、乾隆元年（一七三六）になって、建文帝に、

恭閔惠皇帝

と諡している。

では、どうして明代では、建文帝に諡号・廟号が贈られなかったのであろうか。それは、永樂帝が、建文帝の帝位を篡奪し、「建文」の年号を抹殺したことから係わる。

永樂帝は、洪武三十五年（建文四年）七月壬午の即位の詔のなかで、帝位を篡奪した理由を、つぎのように言い訳し、「建文四年」を「洪武三十五年」とするよう命じた。

詔を下して〔以下のように〕曰く。……少主（建文帝）幼冲の資（『實錄』は「姿」に作る）を以て、大業を嗣守するも、秉心（心持）不順にして、姦回（よこしまな人物）を崇信し、成憲を改更し、諸王を戕害し、

- ✓（1）王鳴聲（字は鳳喈、一の字は禮堂、号は西莊。江蘇嘉定の人。清・康熙六十一年〔一七二二〕～清・嘉慶二年〔一七九七〕。乾隆十九年辛甲戌科〔一七五四〕一甲二名の進士）の『十七史商榷』の「尊號諡法廟號陵名」条に、つぎのようにある。

……凡そ此の〔皇帝に尊号を奉るという〕類は、皆な或いは諡と稱し、或いは尊號と稱する者なり。蓋し生まれながらにして尊號を<sup>たてま</sup>上つるは固より唐に起こる。前世未だ有らざるなり。即ち歿して諡を上つるは、前世亦た一字を用いるのみ。數字を連累する者無し。「至道大聖」が若きは皆な諡と爲すを得ず、故に尊號と云うなり。廟號に至りては、則ち「古者祖有功、宗有德（古者祖に功有り、宗に徳有り）」（『史記』孝文本紀／『漢書』景帝紀）なり。其の功・徳の盛んなるを以てすれば、諡は之を盡すに足らず、故に又た追尊して祖・宗と爲し、加うるに美名を以てす。其の廟は則ち世々の祀 祧（先祖と一緒に合祀する）せず。功有る者は必ず是れ開創す、或いは中興す。漢の光武の如きは始めて之に當るに足る。有徳なれば則ち文（先王の法）を守り、統（帝位）を承くるなり。大抵、有功なるは必ず有徳を兼ね、而れども有徳は未だ必ずしも功を兼ねず。故に此の別有り。然れども「宗」を稱するの濫は、南北朝より已に然り、唐に至れば乃ち帝の「宗」ならざるは無し……（『十七史商榷』卷七十六・十四葉～十五葉・「尊號諡法廟號陵名」条）。

亡くなって諡をつける場合、もともとは一字であった。したがって、諡に加えて「至道大聖」などとするのは、「諡」といわず、「尊号」というのである。廟号については、「祖に功有り、宗に徳有り」といわれ、功・徳が高ければ、諡だけで賞賛できない。そこから「祖」・「宗」をつけ、さらにすばらしい諡を加える。その廟は、末代までも独立したものとし、一定の期間が過ぎても、先祖と一緒にの廟に入れることはしない。「功」があれば、「徳」は兼ねているものである。しかし、「徳」があっても、「功」が付随するとはかぎらない。だから、「祖」と「宗」との違いがある。しかし、「宗」をつけるのは南北朝より乱発され始め、唐朝になるとすべての皇帝に「宗」が付くようになった、という。↗

師保（恩師）を放斥（『實錄』は「黜」に作る）し、宦豎（宦官）に委政し、淫佚（遊興にふける）度（節度）無し。天 上に變ずるも畏れず、地 下に震うも懼れず、災 延<sup>つら</sup>なり天を承くるも其の過ちを文（とりつくろ）い、蝗 飛びて天を蔽うも徳を脩めず。禍機 四發し、將に朕（永樂帝）に及ばんとす。朕（永樂帝） 高皇帝（太祖洪武帝）の嫡子と爲り、祖に明訓有り、「朝に正臣無く、内に姦惡有れば、王兵（仁義の師）を興して之を討つを得」と。朕（永樂帝） 條章を遵奉し、兵を擧げ以て君側の惡を清む。蓋し已むを得ざるに出ずるなり。朕（永樂帝）の兵をして擧げざれば、天下 亦た將に有聲もて罪して之を攻めんとする者なり。少主

✓ 沈德符（字は景倩、又の字は虎臣、号は景伯・清權堂・敝帚軒・甕汲軒。浙江嘉興の人。明・萬曆六年〔一五七八〕～明・崇禎十五年〔一六四二〕。萬曆四十六年〔一六一八〕の舉人）は、明朝の皇帝の諡は十六字であったという。

〔諡號〕大行（なくなればかりの皇帝）の諡號、本朝 俱に十六字を用う。説く者 以て過濫にして、前者 無<sup>な</sup>みする所なりと爲す……『萬曆野獲編』卷十三・禮部・「諡號」条）。

それに対して、王弘撰（字は無異、又の字は文修、号は山史、又の号は待庵。陝西華陰の人。明・天啓二年〔一六二二〕～清・康熙四十一年〔一七〇二〕）は、

帝王の諡有るや、古は或いは一字を用い、或いは二字を用う。今の制は、帝の諡は一字なり、而して上に更に十六字を用う……（『山志』初集卷四・「諡法」条）。

という。

さらに、查繼佐（字は伊璜、号は東山。浙江海寧の人。明・萬曆二十九年〔一六〇一〕～清・康熙十六年〔一六七七〕）の『罪惟録』は、

初め定制、皇帝の崩じ、諡を工うるに、率ね十六字、摠ぶるに一字を以てす。皇后は十二字を用い、帝の諡の統ぶるに一字を以てするに従う。後、嘉靖中に改めて高皇帝に二十一字・皇后に十五字を加う（『罪惟録』卷之七・志・諡典）。

という。つまり、明朝において、太祖洪武帝を除いて、皇帝に贈られた十七字の諡号のうち、最後の一字が十六字を統べる本来の諡となり、そのうえの十六字は、増加された諡（尊号）ということになる。

したがって、この一字の諡を含めると、『明史』でいう十七字となる。

凡そ諡は、帝十七字、后十三字、妃・太子・太子妃並びに二字、親王一字、郡王二字、字を以て差を爲す（欽定『明史』卷七十二・志第四十八・職官一・十九葉）。

なお、『萬曆野獲編』のいう十六字は、本来の一字の諡の上に増やされた諡（尊号）のことを指していると考えられる。

曾て反躬自責（自己を反省する）せず、肆に旅拒（抵抗）を行なう。朕（永樂帝）天地祖宗の靈を荷い、戰勝して攻克（進攻）し、之を壩上<sup>う</sup>に擣ち、之を白溝<sup>ほろ</sup>に殲<sup>ほろ</sup>ぼし、之を滄州に破り、之を藁城<sup>ついで</sup>に潰やし、之を夾河に塵（みなごろし）にし、之を靈壁に轡（ふみにじ）れり。六たび戦う。而して已に〔戦いを〕用いず。朕（永樂帝）是に於いて畿甸に駐師し、其の奸回<sup>もと</sup>を索め、周公の成王を輔するの誼<sup>こいねが</sup>しきを庶幾<sup>なんじ</sup>う。而るに乃（建文帝）は朕（永樂帝）の懷<sup>おも</sup>いを究めず、宮を闔して自焚し、自から宗社を絶てり。〔これは〕天地の庇わざる所にして、鬼神の容れざる所なり。事は止む可からず、朕（永樂帝）乃ち師を整えて入京し、秋毫も犯さず。諸王・大臣は「朕（永樂帝）は太祖の嫡にして、「天に順って人に應じ」（新しい受命者となる：『易』革卦に基づく）、天位は以て久しく虚なる可からず、神器は以て主無き可からず」と謂い、上章して勸進す。朕（永樂帝）之を拒むこと再三なるも獲ず、乃ち俯して輿情<sup>したが</sup>に徇いて、六月十七日に於いて皇帝の位<sup>つ</sup>に即けり。〔そうして〕所有<sup>あら</sup>ゆる合行<sup>おこなうべ</sup>き庶<sup>もろ</sup>もろの政は、並びに宜しく〔以下に〕兼ね擧ぐべし。

一、今年は仍お洪武三十五年を以て紀と爲す。其れ明年を改めて永樂元年と爲せ。

一、建文以來の祖宗の成法の更改有る者は仍お舊制に復せ……（『大明太宗體天弘道高明廣運聖武神功純仁至孝文皇帝實錄』卷之十・「洪武三十五年秋七月壬午」条／『國榷』卷十二・惠宗建文四年・「七月壬午朔」条・八六五頁）。

建文帝は、位を継いだものの、心持が悪く、よこしまな人物を信用し、太祖洪武帝の定めた法を変更し、諸王を迫害し、恩師を追い出し、宦官に政務を任せ、遊興にふけていた。天変地異がおこったけれども、いっこうに反省しない。とうとうその禍が永樂帝に及んできた。永樂帝は、太祖洪武帝の嫡子であり、その教えに「朝廷に正しい臣がなく、邪悪なことがあれば、王兵（仁義の師）を起こして討伐することができる」とあった。そこで、軍を推し進め、王

城のそばに駐軍して、周公が甥の成王を輔佐して国を治めたという故事にならおうとした。なのに、建文帝はその心も知らず自焚してしまった。そのため、懇願されて帝位についた、という。

そして、永樂帝は、「<sup>あ</sup>ら<sup>おこなうべ</sup>もろ<sup>もろ</sup>の政は、並びに宜しく [以下に] 兼ね舉ぐべし」と言い、その第一として「建文四年」を「洪武三十五年」に変更してしまうのである。ここから、「建文」という年号は存在しなかった（革徐）と考えられるようになったのではないか。<sup>(2)</sup>

なお、談遷（原名は以訓，字は孺木・仲木，号は射父・觀若・容膝軒・江

- (2) 『國權』に引用する王世貞（字は元美，号は鳳洲，又の号は弇州山人。江蘇太倉の人。明・嘉靖五年〔一五二六〕～萬曆十八年〔一五九〇〕。嘉靖二十六年丁未科（一五四七）二甲八十名の進士）は、「今年は仍お洪武三十五年を以て紀と爲す。其れ明年を改めて永樂元年と爲す」というのは、年を越えてから改元するという禮に従えと述べただけで、「建文」の年号を覆い隠す意図はなかった。また、永樂帝は詔のなかで「建文」といい年号で建文帝を呼んでいる。これは、建文帝の尊号を認めなかっただけで、年号を抹殺したのではない、といっている。ただ、萬曆二十三年（一五九五）九月十六日に「建文」の年号を復活させる詔がでていることからすると、やはり「建文」の年号は削られたと理解されてきたのではないだろうか。

王世貞 曰く、今、天下 建文を稱して革除の年と爲すは、非なり。成祖 卽位の詔に「今年は仍お洪武三十五年を以て紀と爲す。其れ明年を改めて永樂元年と爲す」と稱す。蓋し猶お年を踰えて改元するの禮を乗り、建文の號をお冒わんと欲せざるのみ。詔の第一款に「建文以來」と稱し、又た臣民を慰嫡するの敕に「太祖 賓天し、建文 位を嗣ぐ」と稱し、大封功臣の勅に、又た文武羣臣を戒嫡するの敕詞に「建文は君たらず」（洪武三十五年十二月丁卯）とあり。蓋し其の尊稱を混ぼすと雖も、未だ嘗て其の年號を削らざるなり（『國權』卷十二・惠宗建文四年・「六月庚午」条所引・八五一頁～八五二頁）。

また、顧炎武（字は寧人，初名は絳，後に炎武に改める。亭林先生と称される。江蘇崑山の人。明・萬曆四十一年〔一六一三〕～清・康熙二十一年〔一六八二〕）は、『日知錄』のなかで次のようにいう。

明朝『太宗實錄』 上に「四年六月己巳」と書し、下に「洪武三十五年六月庚午」と書す。

正に是れ史臣の實書なり。前代と合す。但だ明らかに「建文」の年號を書せず、後人 因りて之を「革除」と謂うのみ（『日知錄』卷二十・「史書一年兩號」条）。

明の『太宗實錄』には、「建文」とは書かないものの「建文」の年号による年月が記され、その下に永樂帝が変更させた「洪武」の年号と、それによる年月とが記されている。これは、これまでの記述法と同じである。ただし、「建文」と書いていないので、これを「革除」である、というのである。

左遺民。浙江海寧の人。明・萬曆二十二年〔一五九四〕～清・順治十四年〔一六五七〕の『國榷』によると、洪武三十五年（建文四年）六月庚午に建文の年号が革除されたという。

〔建文四年六月〕庚午、洪武の舊制を復し、「建文」の紀年を革除し、「洪武三十五年」と稱し、諸殿の舊名を復す（『國榷』卷十二・惠宗建文四年・六月庚午条・八五〇頁）。

また、『國榷』によると、

〔建文四年六月〕壬申、建文皇帝を葬り、祭を致し、朝を輟めること三日なり。上（永樂帝）翰林侍講の王景に問うに喪禮を以てす。<sup>こた</sup>對えて曰く、祭葬は天子に仍<sup>よ</sup>れ、と。之に従う。國子監博士の歙縣の黃彥清 駙馬都尉の梅殷の軍中に在りて、縞素して喪を發す。〔そして建文帝に〕私に「孝愍皇帝」と諡す（『國榷』卷十二・惠宗建文四年・六月壬申条・八五二頁）。

とある。天子の禮でもって葬られたものの、諡はなかった。ただ、黃彥清が個人的に「孝愍皇帝」と諡した、という。

さて、年号の抹殺と皇帝であつたものが与えられる諡との関係は、明・朱鷺（字は白民、号は白愚。吳縣の人）の『建文書法擬』<sup>(4)</sup>の説明によると、つぎのようである。

〔建文諡饗論〕曰く、天子 諡を僭するは、従り來る所久遠なり。此の〔『建文書法擬』の中で、建文帝をあらわすのに、「建文皇帝本紀」として、年号の〕年を僭するは何ぞや。諡の窮まるに通ずればなり。諡有れば、諡

(3) 屠叔方（字は宗直、号は瞻山。浙江秀水の人。萬曆五年丁丑科（一五七七）三甲一百十八名の進士）の『建文朝野彙編』所引の『遜國臣記』・『革除遺事』によれば、「何許の人なるかを知らず。亦た何れの官なるかを知らず」（『建文朝野彙編』卷七報國列傳・五十三葉・「國子監」条）という。

また、『建文朝野彙編』所引の『忠義流芳』・『革除遺忠錄』によると、

黃彥清 國子監博士の時に史官に充せらる。成祖 卽位し、召見さるも屈せず。

死に就く……（『建文朝野彙編』卷七報國列傳・五十四葉・「國子監」条）。

とある。

を僭す。諡無ければ、年を僭して帝を存す。夫れ諡は以て名に易うるなり。仁・暴・興・亡の主 之を共にするを得て、焉<sup>これ</sup>を取らざるはなし。建文 何を以て諡を竊むるや。革除の故なり。年にして且に除かる。何ぞ諡を問わん……（『建文書法擬』正編上・一葉～二葉・「建文諡饗論」条）。

どんな君主ですら諡は与えられる。それなのに建文帝に与えられなかったのは、年号が抹殺されたためである。在位期間をあらわす年号ですら削られるのに、どうして諡があらうか、というのである。朱鷺によると、皇帝は、諡があれば、諡で呼び、諡が与えられていなければ、年号で呼ぶ。逆に言うと、年号が削られるということは、諡すらないということになる。

そもそも、「諡は行いの迹なり。……言うところは先王の行いを論じて以て

✓（４）『建文書法擬』は、『四庫全書總目提要』によると、つぎのように評価される。

明・朱鷺撰。鷺、字は白民。呉縣の人。其の書は萬歴（曆）乙未（二十三年〔一五九五〕）に詔もて革除の年號を復するの時に作らる。蓋し之を朝に上つて以て國史を補せんと欲するなり。故に稱して「擬」と曰う。而して署名自稱して「臣」と曰う……（『四庫全書總目提要』卷五十四・史部十・雜史類存目三・「建文書法擬五卷」条）。

萬曆二十三年（一五九五）九月十六日（欽定『明史』による）に、建文の年号を復活させた時に、作られたものである。明の国史作成の補助にしたいと考えたからで、書名に「擬（僭越ながら国史作成の史料になぞらえる）」がつき、自署して「臣」としているのは、そのためである。

そして、建文帝（惠帝）の失敗を、宗藩を削り、太祖洪武帝の政策を変更したことに求めていることは、正しくない。また、建文帝の出亡（逃亡）説については、従来の意見にしたがうだけである。さらに、即位以前の成祖永樂帝を、「王」とし、即位後に「帝」としているのは、正しい記述ではあるが、明の臣としては適切ではない。夢に太祖洪武帝があらわれ、この書を書く発端となったなどというのは、「妖言」に類するものであるという。

……其の惠帝（建文帝）の失を論ずるに、惟だ宗藩を削り、祖制を變ずるに在りとす。持論 未だ嘗て正しからず。惟だ行遯從亡（建文帝の出亡説）は、尚お舊説に沿るのみ。又た成祖（永樂帝）の未だ即位せざる以前は、「帝」[というのを] 削りて、王と稱す。義に於いては當ると雖も、然れども宜しく明の臣子に出るべからず。序末の題識の一條に至るに、萬歴（曆）甲午（二十二年〔一五九四〕）に明の太祖の示すに「一朝表譜」（序によれば、一朝は建文を指し、表譜は年表と諸臣の譜を指す）の四つの金字を以てするを夢む。次日、具奏し、孝陵（太祖洪武帝の陵）の下に焚けば、復た太祖に召見するを夢む、と稱す。則ち妖言に幾し（『四庫全書總目提要』卷五十四・史部十・雜史類存目三・「建文書法擬五卷」条）。

諡と爲す」(『禮記』表記の鄭注)である諡を贈らないことは、建文帝の事績を無視してしまうことになる。

以下で検討するが、明代において、建文帝の年号や諡をどうするかについては、たびたび議論がなされた。ただし、建文帝の年号を革除したことや天子の称号を抹殺したことを議論すると、朱鷺の次のような意見がでてくる。

……顧だ年號を革除する・天子〔の称号〕を追廢するに急急たり。此れ何をか爲す者ならん。是れ異姓・仇讐（仇敵）の相い尅つの爲す所なり。安くにか其の骨肉の不幸なること在らん。且つ何を以て「靖難（難を靖んず）」を解せんや。夫れ「靖難（難を靖んず）」もて執詞（立論）し、天下の公義を庶幾うも、卒に私を疑わるるは、則ち革除の爲なり。況んや文皇帝（永樂帝）の正位の日、亦た既に發喪し治葬するに、一に天子の禮の如くす。豈に其の生まれて天子の尊を壇にし、死して天子の葬を蒙るも、而して史 獨り貶めて「[建文] 君」と稱し、年〔号〕 獨り削りて用いられざらんや。以て建文は存する足らずと爲すや、皇明の一葉も、亦た存するに足らざらんや……萬曆甲午（二十二年〔一五九四年〕）冬日（『建文書法擬』正編下・五十七葉～五十八葉・「革除建文年號論」条）。

建文帝の年号や天子の称号を急いで抹殺したが、叔父・甥の関係でこのようなことを行なう不幸があろうか。また、永樂帝が旗印とした「靖難（難を靖んず）」をどのように理解したらよいのか。「靖難」を言い訳にしながらも、賛同を得られないのは、建文帝の年号を革除したためである。まして、建文帝を皇帝の禮で葬りながら、建文帝とせず建文君とし、年号を削ってしまうことができるのだろうか。建文帝は存在する価値がなかったのだろうか、明の建文帝のこの時代も存在する価値がなかったとするのだろうか、という。

このように、まず永樂帝の建文帝に対する行為を評価しなければならず、問題がかなり複雑になってくる。そのため、建文帝の年号や諡をどのようにするかが難しかった。

だが、「建文」という年号は、萬曆二十三年（一五九五）九月十六日になっ



て、復活する。しかし、諡号・廟号は、南明政権になるまで、贈られなかった。

ちなみに、黄彦清が個人的に考えた諡である「孝愍皇帝」の「孝」字についてであるが、「諡法」によると、

五宗（高祖・曾祖・祖・父・己）之を安ずるを孝と曰う（五宗安之曰孝）。

慈恵にして親（族親）を愛するを孝と曰う（慈恵愛親曰孝）。

徳を<sup>たが</sup>乗りて<sup>①</sup>回わずを孝と曰う（秉徳不回曰孝）。

時に協いて享を肇むるを孝と曰う（協時肇享曰孝）。

①陳逢衡の『逸周書補注』（道光五年〔一八二五〕刊）は、「秉は順なり。回は邪なり」（卷十四・十七葉）と補注する。それによると「徳に<sup>したが</sup>乗<sup>よこしま</sup>いて回らずを孝と曰う」となる。

とある。先祖を敬い、一族に親しみ、行いを道徳的にし、適切な時期に先祖の祭をする、などの意味があるという。

また、蘇洵の「諡法」では、つぎのようにになっている。

慈恵にして親（族親）を愛するを孝と曰う（慈恵愛親曰孝）。

劉熙 曰く、己の慈<sup>いつく</sup>しむ所・恵む所の心を以て推し、以て親に事うるは、孝の至りなり、と。

能く養いて能く恭しくするを孝と曰う（能養能恭曰孝）。

新たに補す。「子夏 孝を問う。子 曰く、色 難し。事有れば、弟子其の勞に服す。酒食有れば、先生に饌す。曾て<sup>こ</sup>是を以て孝と為さんや、と」（『論語』爲政）と。「子游 孝を問う。子 曰く、今の孝は、是れ能く養うを謂う。犬馬に至るも、皆な能く養う有り。敬せずんば、何を以て別たんや、と」（『論語』爲政）と。

志を繼ぎて事を成すを孝と曰う（繼志成事曰孝）。

「孔子 曰く、武王・周公は、其れ達孝なるかな。夫れ善く人の志を繼ぎ、善く人の事を述ぶる者なり」（『中庸』第十九章）。

時に協いて享を肇むるを孝と曰う（協時肇享曰孝）

こと  
蠱に幹たり用て譽あるを孝と曰う（幹蠱用譽曰孝）

新たに補す。『易』（蠱卦）に曰く、「父の蠱に幹たり。用て譽有り」。象に曰く、「父に幹たり、用て譽あり」（六五象）・「意考を承くるなり」（初六象）。意を以て之を承くのみ。其の事に可ならざる者は、亦た従わざるなり。

徳を乗りて回わずを孝と曰う（秉徳不回曰孝）。

人 其の親に孝にして、徳を乗りて回わずして患難に陥りて其の養うを終えざる者有れば、世 以て不孝と為す。君子 之を閔れみて曰く、是れ亦た孝なり。故に記す。「戦陣に勇無きは、孝に非ずと為す」（『禮記』祭義）は、何ぞや。恐らくは不義を以て親を辱しむればなり。晉の周處 賊と戦いて死す。老母の在る有り。賀循 之に諡して「孝」と曰う。君子 之を臚（是）とす。然り而して人は必ず孝徳有り、而して後に「徳を乗りて回わず」、乃ち孝為るを得。徒に「徳を乗りて回わず」と曰うのみが如き者は、是れ貞と為し、孝に非ざるなり（『諡法』卷三）。

慈恵の心をもって親族を愛する、よく養いよく恭しくする、志を継いで事業を行なう、適切な時期に先祖の祭をする、事業をうまく取り仕切る、行いを道德的にするなどの意味があるという。

つまり、「孝」という諡には、先祖をうやまい、一族に親しむという意味があるといえるだろう。

さらにいうと、漢代の皇帝の諡には、「孝」字が附せられていた。『漢書』惠帝紀の「孝惠皇帝、高祖太子也」条に顔師固（南朝・陳の太建十三年〔五八一〕～唐の貞觀十九年〔六四五〕）は、

〔顔〕師固 曰く、孝子 善く父の志を述ぶ。故に漢家の諡は、惠帝以下 皆な「孝」と稱するなり（『漢書』惠帝紀・「孝惠皇帝、高祖太子也」条）。

と注している。「孝子」であり父の志を遂げたから、諡の上に「孝」をつける

というのである。黄彦清は、これをふまえたのであろうか。すると、「愍」字が、本来の諡となる。

では、「愍」字は、どのような意味を持っていたのであろうか。「諡法」によると、

國に在りて憂<sup>①</sup>に遭うを愍と曰う（在國遭憂曰愍）。

國に在りて難<sup>②</sup>に逢うを愍と曰う（在國逢難曰愍）。

禍亂 方に作らんとするを愍と曰う（禍亂方作曰愍）。

民をして悲傷せしむるを愍と曰う（使民悲傷曰愍）。

①②『逸周書』諡法解は、「在國遭憂曰愍」を「在國遭難曰愍」に、「在國逢難曰愍」を「在國連憂曰愍」に作っている。『逸周書集訓校釋』卷六・「在國遭憂曰愍 / 在國連憂曰愍」条では、「難」と「憂」とを、「難は外患なり。[それは] 災癘水旱・民 夭折多きなり。憂は、内難なり」と注している。

とある。

蘇洵の「諡法」では、

國に在りて難に逢うを愍と曰う（在國逢難曰愍）。

或いは「閔」に作る。『史記』魯閔公・宋愍公の類は、皆な「潛」に作る。義 同（「諡法」卷四）。

という。

つまり、「愍」には、国内において災害や外からの災難に遭遇する・戦乱が起ころうとする・人々を悲しませることなどの意味があるというのである。

また、「愍」字は、『通志』諡略では、「中諡法」の十四字の中の一字に分類され、

右、十四の諡は、之を閔傷に用う・之を後無き者に用う（『通志』卷四十六・諡略第一・諡中）。

悲しむべきことや、後が無い者に用いる文字であるとされる。『通志』諡略では、「愍」字は、「殲夷（誅滅すべき人）」や「小人」に用いる「下諡法」には分類されていない。「愍」字は、否定的にもちいられる文字ではなかった。

すると、黄彦清は、建文帝が先祖をうやまい、一族に親しみながら、災難にあい、人々を悲しませた皇帝であったと考え、この諡をおくったのであろうか。

なお、「孝愍」字の諡をあたえられた皇帝には、晋の孝愍帝と後漢の最後の皇帝である獻帝に、三国蜀が諡して「孝愍帝」としたものがある。

以下で、諡号やそれをめぐる議論を通して、明・清において建文帝はどのように評価されてきたのかを検討してみたい。

(つづく)